C'n scene news

VOL. 110

千葉市美術館ニュース 「C'n」(シーン) 110号

千葉市美術館 Chiba City Museum of Art

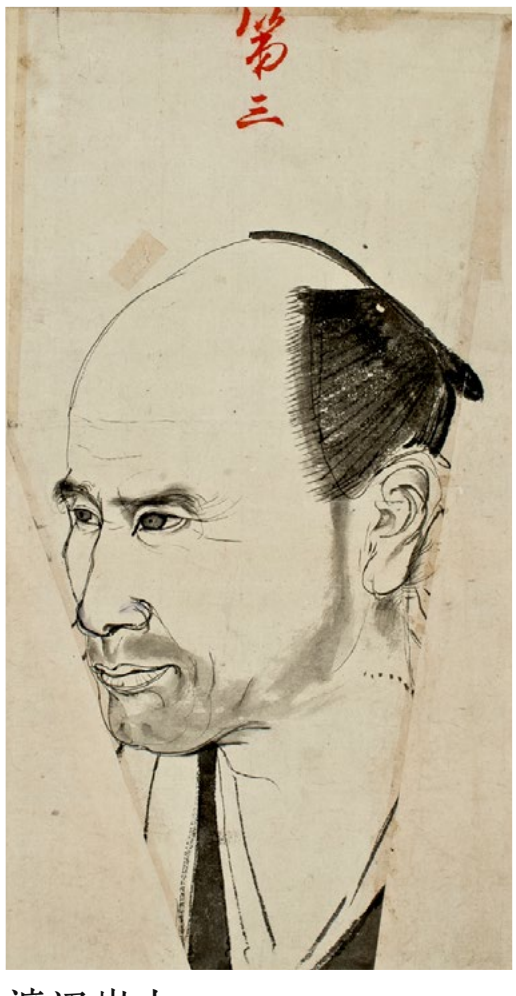
ccma_jp
ccma_jp

［編集・発行］千葉市美術館 〒260-0013 千葉市中央区中央3-10-8 TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art 3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-0013, Japan
https://www.ccma-net.jp/ ［発行日］2023年12月19日 ［印刷］株式会社 エイチケイ グラフィックス

鳥文斎栄之《貴婦人の船遊び》 大判錦絵3枚続 寛政4-5年（1792-93）頃 ボストン美術館蔵 Museum of Fine Arts, Boston. William Sturgis Bigelow Collection 11.14119-21 Photograph ©2023 Museum of Fine Arts, Boston

館長のつれづれコレクション案内

家老にして絵師 渡辺華山の人物スケッチ



渡辺崋山
「佐藤一斎像画稿 第三～第七」
文政4年（1821）頃 紙本墨画淡彩
5幅のうち第三 39.1×20.7㎝

だれでも簡単に写真を撮って即座に保存することができるようになった今日、筆やペンでスケッチをする機会は稀になりました。私たちが学生であった1970年代には、美術作品の調査の際、ノートに作品を簡単にスケッチしてから文字でメモを書き入れる先生方が沢山おいでになりました。物を目の前にして、その形を実物そっくりに描き出すのはとても難しいことです。描く対象が人の顔の場合には、形が複雑である上に、その人の内面をどうとらえて表すかということもあって、描く難しさは増します。どの表情をどの角度からとらえれば、モデルとなっている人の外見の特色、さらには内面性をも表せるのかを考えることが必要になります。

このたびご紹介する作品は田原藩士であった渡辺崋山（1793-1841）が、儒学者として江戸幕府に仕え、門人3千人と言われた佐藤一斎（1772-1859）の顔を描いたスケッチです。これらは崋山の肖像画の優品として知られる「佐藤一斎像」（東京国立博物館蔵、国指定重要文化財、1821年）の画稿と考えられています。画中に朱書きされた数字から、画稿は少なくとも11点制作されたと推測されており、現存する7点のうち当館は5点を収蔵しています。それらを比較してみると、定型化された着物の部分の表現に比して、崋山の意識が顔の表現に集中していること、幾度か見る角度を変えて検討していること、目や眉、鼻梁に線を重ね、対象をとらえようと苦心したことなどを見て取ることが出来、調えられた完成図以上に渡辺崋山という人が身近に感じられます。崋山は当時から肖像画の名手とされ、依頼も多く、完成までには頻繁にモデルの写生に通ったようです。実物を前にして、見たものを描き出そうとするこのまなざしは、「石版の画舶来するものを得て、愈々西洋画技の絶妙を称歎し、其意致を倣ふ」（註1）と回想されたように、西洋絵画の写実に学んだものでした。

崋山は田原藩江戸藩邸に生まれ、後に同藩家老となり、綱紀粛正、倹約の徹底によって藩政の改革に当たり、天明の大飢饉でも藩内での餓死者を出さないなどの名家老ぶりであったとされますが、太平洋に面した渥美半島に位置する藩の海防を研究する中で蘭学者と交流し、鎖国批判を含む「慎機論」を著わしたことから蛮社の獄で捕らえられ、49歳で自刃しました。幼い頃から絵が得意で、田原藩の経済的困窮や父の病気などのため、兄弟姉妹が幼くして奉公に出され、あるいは病死するなど、常に生活が苦しかったことから、若い頃から絵を賣って家計を助けており、崋山にとって絵は実益をもたらす副業でもありました。

12歳の頃、日本橋付近で備前池田藩侯の御先共にぶつかり打擲され、同じ人間であるのに身分差があることに憤慨し、勉励の志を立てたと回想する崋山は、当時の最高学府であった昌平坂学問所に学び、絵は狩野派を学んだ後、幕府お抱え絵師であった谷文晁に師事して、画才にも磨きをかけました（註2）。佐藤一斎には昌平坂学問所で師事しており、「心事の相談致し、萬事隠さず候事」（註3）となんでも相談する関係であったと崋山は記していますが、蛮社の獄で捕らえられた崋山を昌平坂学問所の教授であった松崎慊堂が身を賭して救済しようとしたのに対し、一斎は加わっておらず、言動不一致との批判もあるようです。

崋山は房総を旅して、武蔵、下総、日立、上総の旅のスケッチ「四州真景図」（国指定重要文化財、1825年）を残しています。一斎像を描いた数年後の文政8年（1825）、三宅坂にあった田原藩江戸藩邸を出発し、行徳から木下街道を歩いた崋山が描いた鎌ヶ谷などのスケッチは、草を食む馬のいる草原が広がる二百年前の風景を活き活きと伝えてくれます。

［館長 山梨絵美子］

註
1 三宅友信『崋山先生略伝』『崋山全集』第1巻 崋山会 1915年
2 鈴木進「渡辺崋山」『日本美術絵画全集』第24巻 集英社 1980年
3 鈴木清節編「渡辺家年譜」『崋山全集』第2巻 崋山会 1915年

Chobunsai Eishi: The Samurai Turned Ukiyo-e Artist

サムライ、浮世絵師になる！
鳥文斎栄之展

担当学芸員インタビュー

鳥文斎栄之（1756 – 1829）は、浮世絵の黄金期とも称される天明〜寛政期（1781 – 1801）に、同時代の喜多川歌麿（? - 1806）と拮抗して活躍した浮世絵師です。世界ではじめてとなる栄之展が、2024年1月6日より始まります。展覧会の見どころや注目したいポイントを、担当学芸員に聞きました。
［話し手：副館長　田辺昌子、学芸員　染谷美穂］

【図1】鳥文斎栄之《松竹梅三美人》　大判錦絵　寛政4-5年（1792-93）頃　ボストン美術館蔵
Museum of Fine Arts, Boston. William Sturgis Bigelow Collection 11.14079 Photograph ©2023 Museum of Fine Arts, Boston

【図2】鳥文斎栄之《青楼美人六花仙　松葉や若菜》　大判錦絵　寛政6年（1794）頃　大英博物館蔵
The British Museum, 1945,1101,0.24 © The Trustees of the British Museum

【図3】鳥文斎栄之《若那初衣裳　松葉屋染之助　わかき　わかば》　大判錦絵　寛政6年（1794）頃　ボストン美術館蔵
Museum of Fine Arts, Boston. William Sturgis Bigelow Collection 11.14082 Photograph ©2023 Museum of Fine Arts, Boston

【図4】鳥文斎栄之《風流やつし源氏　松風》　大判錦絵3枚続　寛政4年（1792）頃　大英博物館蔵
The British Museum, 1907,0531,0.436.1-3 © The Trustees of the British Museum

――鳥文斎栄之という浮世絵師を大々的に取り上げた展覧会は今回が世界初だそうですね。

田辺　当館はこれまで多くの浮世絵の展覧会を開催してきましたが、鳥文斎栄之は喜多川歌麿や葛飾北斎など六大浮世絵師に数えられる絵師たちに比べてあまり知られていません。当時の人気も高かったと思われる栄之ですが【図1】、今日にその名が知られていないのは、国内にあまり作品がないことが理由としてあります。もともと庶民向けに大量に摺られるというよりは、やや高くなっても少量を摺るというような制作・販売方法だったと思われますが、作品数が少ない上にその多くが海外へ流出しています。栄之は見る機会が少ないだけに注目されてきませんでしたが本当は重要な浮世絵師で、海外から作品を借りて大々的に展覧会で紹介するのは、空前はもちろんですが絶後じゃないかなと思います。

――歌麿と拮抗した絵師であるにも関わらず、その後の知名度に大きな差があるのは驚きました。

田辺　版画は量産されるだけに普及力に直結し、後世作品が残っているか否かで評価が左右されてしまうようなところもあります。

染谷　栄之に関しては研究者もあまりおらず、海外からの逆輸入で研究が始まっています。1913年におこなわれたパリの展覧会では、栄之は歌麿よりも年下だと思われていて、「栄之が一方的に歌麿の美人図をうまく取り入れている」といったような間違った紹介もされており、そうしたところもその後の評価につながってしまっているのかなと思います。

――栄之は武家出身の画家ですが、画業にその影響は見られるのでしょうか？

田辺　錦絵の世界では企画者である版元がいて、その販売策略として武家出身であることを売りにしようとした側面はあると思います。栄之は老舗の西村屋から多く出版していますが、西村屋は鳥居清長に次ぐ新たなスターを探していたと思います。一方で歌麿は蔦屋の看板絵師で、大首絵で売っていました。栄之は蔦屋が亡くなる頃まで大首絵は手がけてないので、出版界の勢力地図としては棲み分けがあったのではないかという気がします。また、吉原に関して言えば、吉原の浮世絵に描かれるような遊女は普通の人は相手してもらえない「観音様」みたいな存在で、浮世絵師でも実際に会える人はそんなにいないのですが、栄之は武家出身なのでわりと厚遇されたのではないかと思います【図2,3】。

――栄之が描く美人画はとても華やかで優雅な雰囲気です。

田辺　栄之のアイコンともいえるのがこの全身座像です。全体的に品の良い雰囲気が出ています。

染谷　襟がピシッと立っていて、女性をきちんとしているように描くというのは栄之の特徴だと思います。あとは、着物の柄は凝ったものが多いです。

田辺　背景の設えもすごく凝っていますよね。例えば、中国風の小道具が背景に描かれていたりすると、当時は中国風というのが一つのおしゃれなスタイルであったので、上流の生活を知っているんだなということが伝わってきます。あと、美人画に重要なのは髪の毛の表現ですね。一般的に黒一色で摺っていると思われがちですが、実は通常の墨と艶墨（つやずみ）というのを重ねたりして立体感を出すなど、こだわっています。

染谷　一方で、歌麿は大首絵で大成したので、髪の毛の表現ではオーバーなくらいに生え際を強調したりうなじの表現にこだわったりしています。どこを魅力的に見せたいかによって絵師が強調する点も異なっています。

――色彩でいうと、栄之は「紅嫌い」（赤い色をわざと避けた錦絵）の手法をしばしば用いているとか。

田辺　その手法は他の浮世絵師もやってはいるのですが、栄之が扱う主題に一番合っていたのではないかという気はします。

染谷　『源氏物語』を主題にした作品に多く見られるのですが、テキストをよく理解しているからこそできる色彩表現だなと思うところがあり、そこはおもしろいところですね【図4】。

田辺　錦絵に良い紅を使っているというのは確かだと思います。紅はよく使われる色の中で一番高価な絵の具です。紅にも色々ありますが、紅花からつくられる色は黄色い色素と赤い色素が混在している状態で、その黄色い色素を限りなく抜いていくとピュアな赤になるのですが、どれだけ黄色成分を抜いたかによって値段が決まります。栄之が使う紅は精製度の高いもので、褪色してないものは本当に綺麗です。色素を取り出すのが難しい分、紅をふんだんに使えるのは非常に贅沢ですよね。雲母摺（きらずり）*でキラキラしていたり、空摺（からずり）*で模様が入っていたり、非常に凝った摺りもよく見られます。

*雲母摺…雲母の粉を絵の具に応用したもの。
*空摺…絵の具をつけずに摺って凹凸だけで模様をあらわす技法のこと。

――今回は新発見の作品も出品されます。

田辺　《和漢美人競艶図屏風》【図5】は新たに発見されたもので、こちらは肉筆画です。肉筆画は、彩色や描写もすごく濃厚なのですが、本展では国内の名品が並びます。

染谷　錦絵の制作は寛政の改革が厳しくなってきた頃にやめてしまうので、錦絵で活躍したのは割と短いのですよね。本作は中国と日本の美人画をそれぞれ描いたもので、中国の衣装や装飾品は中国で出された版本を参考にした可能性があるのですが、日本と中国の美人像がはっきりと描き分けられています。サインの位置から、このシリーズの美人画はまだ他にもあったのではないかと推測されます。

田辺&染谷　本展を通して、これまで知られてこなかった栄之の、魅力あふれる作品の数々をぜひ知っていただきたいです。

【図5】鳥文斎栄之《和漢美人競艶図屏風》　絹本着色6曲1隻　文政（1818-30）前期頃　個人蔵

サムライ、浮世絵師になる！
鳥文斎栄之展
会　期　2024年1月6日［土］– 3月3日［日］
前期：1月6日［土］– 2月4日［日］
後期：2月6日［火］– 3月3日［日］
会　場　8・7階 企画展示室
休室日　1月9日［火］、15日［月］、
2月5日［月］、13日［火］
※第1月曜日は全館休館
詳細はホームページよりご覧ください

「つくりかけラボ13　黒田菜月｜野鳥観察日和」イベントレポート

参加者と振り返る《鳥の名前を届ける》

＊《鳥の名前を届ける》とは
「野鳥観察日和」に展示中の映像作品。2023年5月に習志野市谷津干潟自然観察センターで開催したワークショップの記録。ワークショップには6名が参加し、二人一組で「観察係」と「記録係」にわかれて野鳥観察を行った。たがいにトランシーバーで報告や質問を交わしながら、声だけを頼りに野鳥観察を試みた。

10月29日（日）に、つくりかけラボ13オープニングイベント「黒田さんといっしょに鑑賞会＋トーク」を開催しました。作家の黒田さんと、展示中の映像作品《鳥の名前を届ける》を鑑賞したあと、映像に登場する4名も交えてアーティストトークを実施。映像におさめられた5月のワークショップを振り返りました。イベントのようすの一部をご紹介します。

［登壇：黒田菜月（本展作家）、鈴木祐太（観察係）、髙橋祐志郎（観察係）、橋本いぶ希（記録係）、松浦開（記録係）／撮影：西澤諭志］

黒田　それぞれの観察や記録の仕方についてお聞きしたいのですが、橋本さんは野鳥観察をしたことがあったんですよね。

橋本　そうですね。もともと野鳥を見ることが好きで、鳥の知識を多く持っていたので、自分からする質問の内容も鳥にかたよっていたり、白紙の記録用紙を使って鳥の絵を描いたりしていました。なので、記録の仕方は個性が出ていておもしろいなと思いました。

黒田　一方で、松浦さんは風景について質問していることが多かった印象があります。

松浦　大学院で建築を専攻しているので、風景や建物に興味があることが大きく関係していると思います。「いまそこになにが見えているのか」ということが気になって、風景に関する質問が多くなりました。

髙橋　自分は写真学校で写真を勉強していて、風景を撮ることが多いので、風景に目を配っていたかなと思います。なので、松浦さんの質問は、自分の視点や気になっている部分と近いところがあり、やりやすかったです。

黒田　今回のワークショップでは、二人一組のペアで観察と記録を進めていったのですが、観察の最中は顔を合わせていませんでした。終わったタイミングではじめて会う構成になっていたので、相手がどんな人かわからない状態でやりとりをするのは大変だったと思います。松浦さんと髙橋さんのペアは噛み合っていましたね。鈴木さんはどうでしたか。

鈴木　動物や自然全般が好きではあるのですが、だれかわからない人にたいしてなにかを伝えるということが、自分は恐る恐る……という感じでした。合流して相手が中学生であることを知って、「ああ！」みたいな（笑）。

会場の方から　ワークショップが終わったあと、みなさんになにか変化はありましたか。

橋本　ワークショップのなかでは、観察係が実際に見ていたものを知ることができなかったので、ワークショップが終わってから、観察係が通った道を一周してみました。こんな風景を見ていたんだ、とか、言語化されていたのはここだったのか、とか、いろいろなことを認識できて楽しかったです。

松浦　自分も帰りに谷津干潟を歩いていたら、途中で橋本さんに会って（笑）。野鳥観察に詳しいと聞いていたので、どういうところを見るのかを聞いて、観察係を疑似体験しているような気持ちになりました。

髙橋　映像中に、自分が「体がしっかりしている鳥」と言う場面があったのですが、いま思うと「『体がしっかりしている鳥』ってなんだ？」と感じて。今回は相手の記録係が同年代だったので伝わった気がしましたが、これが中学生や社会人、高齢の方だったら伝わっていたのかな？と思いました。伝え方というか、目に見えないものの不確かさというか。言葉を選ぶようになりましたね。

鈴木　終わってから、ふだんよりも風景をよく見るようになりました。帰り道とか、空をよく見るようになったり、まわりの風景の変化を見るようになったり。あとは、語彙力ですね。ボキャブラリーをもっと増やしたいと感じました。それと、映像にも中学生ならではの反応が映っているのですが、ああいったなにかを見たときの新鮮な感情も大事にしていきたいと思いましたね。

つくりかけラボ13
黒田菜月｜野鳥観察日和
会　期　2023年10月28日［金］－2024年1月28日［日］
休館日　第1月曜日、12月25日［月］、12月29日［金］－1月3日［水］
会　場　4階 子どもアトリエ
入場料　無料

＼次回予告／

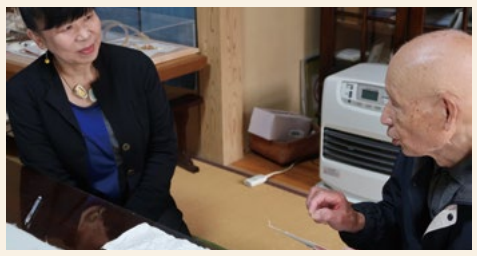
「つくりかけラボ14　荒井恵子」

和紙のフトコロ 墨のダイゴミ

じつはこのプロジェクト、ずっと前から始まっているのです！

年明け2月半ばから始まる「つくりかけラボ」では、墨と和紙を使った水墨表現に取り組む美術家の荒井恵子さんをお迎えします。「和紙のフトコロ 墨のダイゴミ」と題して、荒井さんが制作のパートナーとしてきた和紙と墨の魅力を味わうための和の空間が出現します。

1 荒井さんと和紙の里を訪問



荒井恵子さんと岩野市兵衛さん

岩野平三郎製作所の作業風景

まだ寒さの残る今年の3月、荒井さんと一緒に、越前和紙職人で人間国宝の岩野市兵衛さんと、大きな和紙を生産している岩野平三郎製紙所を訪ねました。いずれも、制作に欠かせない和紙の作り手として、荒井さんが長くお付き合いされてきた方々です。

紙漉きの仕事を長く続けてこられた市兵衛さんに和紙についてお話をうかがい、製紙所では大きな紙を漉く作業の様子を見せていただきました。

この取材の成果は、動画として公開できるよう、編集作業を進めています。

2 「墨でつながるプロジェクト」

荒井さんが取り組んでこられた、使わなくなって、どこかで眠っている「墨」を受け取り、蘇らせるプロジェクト。美術館でも、今回のつくりかけラボにあわせて来館者の皆さんから墨を集めています。

館内2箇所に置かれた透明なボックスの中には、様々な墨が…。皆さんからいただいた墨は、会期中のオープンワークショップなどで活躍する予定です。

「墨でつながるプロジェクト」
2024年2月13日まで（予定）
※墨はまだまだ募集中

3 「SEEDプロジェクト」

和紙づくりに必要なトロロアオイ（黄蜀葵）を育てて種を取るプロジェクトです。今年の5月、荒井さんからいただいた種を美術館ボランティアスタッフの方々に託し、育ててもらいました。美術館でも種を蒔き、収穫できました！　収穫された種は再び集められ、会期中、来場者の皆さんにお持ち帰りいただく予定です。そこからまた、次の世代が育ちますように…。

トロロアオイの種

4 「障子はり」で、いよいよスタート！

会場の中心につくられるのは、六畳間のスケールで区切られた空間です。周りを障子で囲み、中央には大きなちゃぶ台が置かれる予定です。アトリエに集められた木枠のみとなった障子は、荒井さんが古い家などで使われなくなったのを譲り受けたもので、大きさも様々です。

会期に先立ち、障子はりをします。障子はりなら任せて！　という経験者も、初めての方も、皆さんのご参加をお待ちしています！！

「障子はり体験」
2024年2月4日［日］13:00–
定　員　20人、小学生以上
参加費　無料

つくりかけラボ14
荒井恵子｜和紙のフトコロ 墨のダイゴミ
会　期　2024年2月14日［水］－5月26日［日］
休館日　3月4日［月］、4月1日［月］、5月7日［火］
会　場　4階 子どもアトリエ
入場料　無料

これからの展覧会とイベント

1/6~ 武士と絵画
―宮本武蔵から渡辺崋山、浦上玉堂まで―

「サムライ、浮世絵師になる!　鳥文斎栄之展」と同時開催!　こちらもお見逃しなく!

鳥文斎栄之が旗本出身の浮世絵師であったことにちなみ、同時開催展として「武士と絵画―宮本武蔵から渡辺崋山、浦上玉堂まで―」を開催します。武士を描いた作品や、武士が描いた作品など、当館の日本美術のコレクションを中心にご紹介します。

渡辺崋山《佐藤一斎像画稿第五》　文政4年(1821)頃
千葉市美術館蔵

浦上玉堂《雨褪臙脂図》
文化期(1804-18)前半
千葉市美術館蔵

武士と絵画―宮本武蔵から渡辺崋山、浦上玉堂まで―
会　期　2024年1月6日[土]－3月3日[日]
会　場　7階 企画展示室
休室日　1月9日[火]、15日[月]、2月5日[月]、13日[火]
※第1月曜日は全館休館
詳細はホームページよりご覧ください

1/20~ ＼今年もやります!／ 新春の獅子舞と浮世絵ウィーク

新春の獅子舞

1 階さや堂ホールにて、千葉市中央区にある登渡神社登戸神楽囃子連の獅子舞がお迎えします。どなたでもご自由にご覧いただけます。

日　時　2024年1月6日[土]
10:00－
場　所　1 階 さや堂ホール
参加費　無料

浮世絵ウィーク

彫摺(ほりすり)の道具類や絵具、摺(すり)の工程を示す順序摺(じゅんじょずり)の展示、重ね押しスタンプの体験に加え、会期中のイベントとして摺の実演、江戸時代からの伝統芸能なども予定しています。新年のひとときを、江戸文化を楽しみましょう。

＊会期中のイベント

1月20日[土]	14:00－	浮世絵の摺実演と解説（アダチ伝統木版画技術保存財団）
1月21日[日]	10:30－12:00 13:30－15:00	美術館ボランティア「もくもく会」による木版多色摺体験
1月27日[土]	11:00－	飴細工実演（飴細工師 花輪茶之介）

詳細はホームページよりご覧ください

日　時　2024年1月20日[土]－28日[日]
10:00－18:00(金・土曜日は20:00まで)
場　所　1階 さや堂ホール
観覧料　無料

3/9~ コレクション展 房総ゆかりの作家たち 特集展示：石井光楓

無料で千葉市美術館のコレクションをご覧いただけます!

「第55回　千葉市民美術展覧会」と同時開催で、当館のコレクションから房総ゆかりの作家と作品をご紹介します。今回取り上げるのは、千葉県夷隅郡生まれの洋画家・石井光楓(1892-1975)。1921 年、洋画研究のために 30 歳にして渡米した石井は、その後パリを中心として欧米に滞在し研鑽を積みました。石井の眼をとおしてあらわされるアメリカやヨーロッパの風景は、石井のみずみずしい感動と期待をふくんでいます。

石井光楓《フランスのビアホール》
1925-31年 千葉市美術館蔵

石井光楓《フランスの農村》
1930年頃　千葉市美術館蔵

コレクション展　房総ゆかりの作家たち 特集展示:石井光楓
会　期　2024年3月9日[土]－29日[金]
会　場　7階 企画展示室
観覧料　無料
休室日　会期中無休
詳細はホームページよりご覧ください

びじゅつライブラリーおすすめ本紹介コーナー　**本をみる、美術をよむ vol.10**

子どもから大人まで!　楽しく読める浮世絵の本

千葉市美術館のコレクションの大きな魅力のひとつ、浮世絵。びじゅつライブラリーにも、浮世絵にまつわる本がたくさん揃っています。子どもから大人まで楽しめる本をご紹介します。

「びじゅつライブラリー」とは、千葉市美術館 4 階にある図書室です。美術にまつわる親しみやすい本を、約 4,500 冊配架しています。ぜひふらっと遊びにきてください!

世界にほこる日本の伝統文化 はじめての浮世絵1 ～ 3

「浮世絵とはなにか」というはじめの一歩から教えてくれる、子ども向けのシリーズ。たくさんのカラー図版とともに、ジャンルやモチーフなど細かいところまで紹介されているので、大人も読んでいて飽きません!

ジュニア版もっと知りたい世界の美術1 北斎と広重

葛飾北斎と歌川広重、「浮世絵といえば」なふたりの絵師を取り上げた1冊。誌面のデザインもシンプルでわかりやすく、両者の経歴や作品をくわしく追うことができます。実寸大に掲載された図版も見どころ。

こどもと絵で話そう　ミッフィーとほくさいさん

あのミッフィーと葛飾北斎がコラボレーション!　北斎の作品について、ミッフィーがいろいろな質問を投げかけます。小さな判型でテキストもやさしく、絵本のように読めるので、浮世絵の入口にはぴったりです。

もっと知りたい　浮世絵

浮世絵の知識をさらに深めたい人は必読!　当館副館長・田辺昌子による書籍です。浮世絵の誕生から明治の転換まで、詳しい解説で知ることができます。もちろん鳥文斎栄之も紹介されていますよ。

くもんの子ども浮世絵コレクション　遊べる浮世絵 江戸の子ども絵・おもちゃ絵大集合!

浮世絵には、子どもがたくさん登場します。また、すごろくやなぞなぞなど、おもちゃになる浮世絵もありました。ユーモアのあふれるかわいらしいイメージからは、生活に息づく浮世絵を楽しむことができます。

江戸猫　浮世絵猫づくし

猫、猫、猫!　とにかく猫。浮世絵に登場する猫だけを集めた1冊。毛繕いをしていたり、外を眺めていたり、擬人化して服を着させられていたり、いつの時代も人間は猫がかわいくて仕方がないのですね。